



TITLE:

京大広報 No. 619

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

---

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 619. 京大広報 2007, 619: 2287-2302

ISSUE DATE:

2007-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/196472>

RIGHT:



# 京大広報

No. 619

2007. 1



第8回国際シンポジウムを開催  
—関連記事 本文2290ページ—

## 目次

新しい年を迎えて	総長 尾池和夫	2288
<b>〈大学の動き〉</b>		
新年名刺交換会		2289
第8回京都大学国際シンポジウム「地球社会の 調和ある共存に向けて」をバンコクで開催		2290
<b>〈部局の動き〉</b>		
化学研究所創立80周年記念行事を挙行政		2291
防災研究所が江原国立大学校防災技術専門 大学院と部局間学術交流協定を締結		2292
<b>〈日誌〉</b>		2292
<b>〈寸言〉</b>		
一艇あって一人なし	伊藤七郎	2293
<b>〈随想〉</b>		
「民主」とデモクラシー	名誉教授 狭間直樹	2294
<b>〈洛書〉</b>		
上海センターの活動について	山本裕美	2295

## 〈栄誉〉

吉川忠夫名誉教授、御牧克己文学研究科教授が 日本学士院会員に選ばれる	2296
平成18年度医学教育等関係業務功労者表彰	2297

## 〈話題〉

「福井謙一京都大学名誉教授ノーベル化学賞 受賞25周年記念シンポジウム」の開催	2297
フィールド研「第3回時計台対話集会」を開催	2298
「事務改善提案コンクール」表彰式を開催	2298

## 〈訃報〉

	2299
<b>〈お知らせ〉</b>	
霊長類研究所オープンキャンパス・大学院 ガイダンス	2300

## 〈隔地施設紹介〉

理学研究科附属天文台	2301
------------	------

京都大学広報委員会

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

## 新しい年を迎えて

総長 尾池 和夫

皆さま、明けましておめでとうございます。

今年は、干支でいうと丁亥(ひのとい)です。丁(ひのと)は十干の4番目で火の弟の意味です。陰陽五行で「火」性の「陰」であり、昨年の丙(ひのえ)のような燃えさかる火ではなく、ほのかな火を象徴しています。亥は、陰陽五行で「水」性の「陰」に当たり、「亥」の字は「とぎす」という意味で、生命力が種子の中に閉ざされた様子を表します。

猪はヨーロッパにも登場します。古代ローマ都市のポンペイの遺跡を調査している浅香 正先生(同志社大学名誉教授)からの年賀状には、ポンペイの遺跡のモザイクがプリントされていました。フォルムからサルノ門へ通じる大通りに「猪の家」があり、その床面に番犬に追われる猪が白黒のモザイクで描かれているそうです。

今年1月1日、ヨーロッパでは、ブルガリアとルーマニアがヨーロッパ連合(EU)に加盟し、また、スロベニアがユーロを導入しました。EUの発展は着実に進み中で、2010年の完了を目指して、ボローニャ宣言に基づく改革の動きが進んでいます。今年5月にはロンドンで次の会議が開かれる予定です。

京都大学はご承知のように、1897年に創立されましたので、今年は創立から110年ということになります。京都大学百年史では、前史として舎密局(1869年)から第三高等学校へという歴史をあげていますので、それを含めて数えると、148年ということになります、いよいよ再来年は創立150年といえるかもしれません。また、このように歴史を読むことには反対もあることと存じます。第三高等学校の折田彦市先生の像が、二本松にあった由緒あるキャンパスに建てられるのも、歴史の重みであると思います。

昨年の1年間、すぐに思い出すいくつかの出来事がありました。京都大学附置研究所・センター主催のシンポジウムを東京・品川インターシティホールで開催しました。「京都からの提言－21世紀の日本を考える(第1回)」という総合テーマのもと、満員の聴衆を迎えて朝から夕方までのシンポジウムは大成功でした。第1回「京都大学総長賞」授賞式を行いました。「素粒子の世界を拓く－湯川秀樹・朝永振一郎生誕百年記念－」展示会の開会式・内覧会を開催しました。地域研究統合情報センター、大学院経営管



理研究部・教育部、大学院公共政策連携研究部・教育部の看板を掲げました。北京の清華大学科技园内に京都大学リエゾンオフィスを開設しました。第1回のガウス賞が、伊藤 清名誉教授に伝達されました。京都大

学女性研究者支援センター設立記念シンポジウムを開催し、100人を超える学内外の研究者、市民が参加しました。念願の京都大学同窓会設立総会が開催されました。第8回京都大学国際シンポジウムをタイで開催しました。今回は、本学の基本理念である「地球社会の調和ある共存への貢献」を目指し、学際共同の第一歩をしるそうとするものでした。

昨年は、いろいろ興味を持つきっかけを与えてくれることのあった年でした。その中には京都大学の研究に関連の深いこともたくさんあります。

まず超新星です。藤原定家の日記「明月記」に「寛弘3年4月2日癸酉(みずのととり)(西暦1006年5月1日にあたる)夜以降、騎官(古代中国の星座名)中有大客星」とあり、超新星の出現の日を記した文献として世界的に知られています。「おおかみ座」の方向です。この1000年後の姿をとらえた画像を、昨年は見ることができました。「明月記」に記された、「大客星」は、人類の記録上では最も明るく輝いたとされる超新星であり、「SN1006」という名を持っています。その出現から、昨年5月1日で1000年を迎えるのに合わせて、2005年7月に打ち上げられたエックス線天文衛星「すざく」で、理学研究科の小山勝二教授らのグループがとらえた、SN1006の最新画像が公開されました。12月に行われた京都での国際会議では、SN1006の特別セッションも設けられました。

私の分野の関係では、西暦年で末尾に6とつく年の巨大地震がいくつかあります。1976年には、20世紀で世界最大の震災をもたらした、24万2千人の死者を出した唐山地震がありました。

さて2007年ですが、昨年12月24日の閣議決定を経て、平成19年度の概算要求に関する内示があり、また、続いて平成18年度の施設整備に関する補正予算



による整備事業実施予定の通知がありました。もともとずいぶん調整していただいた絞り込んだ要求を出しており、京都大学が計画する教育と研究と医療に必要な予算は、概算要求がすべて通ったとしても、決して十分といえないのではありますが、関係の皆さまのご努力によりまして、国の支出状況のたいへん厳しい中、多くの要求項目が実現したことをうれしく思っております。

京都大学は総合大学として、その自由の学風の伝統を最大限に活かして世界に貢献してまいります。その根底を支える学術の中心を大切に今年もしっかりと落ちついた仕事をして行かなければなりません。今、国立大学法人の第1期中期計画の半ばにあって、暫定評価をどのように実施するかという議論が行われています。日本の議会や政府には、大学を評価する文化がまだ十分に育っているとは思われません。たとえ評価がどのような形で行われるとしても、京都大学の基本理念そのものが国の評価の対象となることは容認できません。京都大学でなければできないこと、かつ京都大学が守って行かなければならないことがあります。それらを示すキーワードの多くが、今、世界にもっとも必要なものに対応していると思います。それは例えば哲学であり、こころの未来であり、地球社会の調和ある共存であります。中でも哲学ということばは、日本で生まれ中国でも使われていることばです。これらのことばを、

しっかりとした中味のあるものとして大切にしていかなければならないと思っています。

昨年までに、京都大学の事務組織の改革が形の上で整えられたと思います。教育研究推進本部と経営企画本部とがあり、グループ長がいて日常業務を行っているという形がすでにあります。今年はその形が実質的に機能を発揮するよう定着させなければなりません。そのための具体的な取り組みとして、グループ長のそれぞれの方々がどういうことを目標としているか、課長さんたちが目標をどのように表現して周囲に伝えているか、今年はそのことを私自身の目で確認してまいりたいと思っています。

私の目標は今年も、学生のための京都大学を磨いていくこと、世界の人に京都大学を知ってもらうこと、地域に貢献すること、地球を大切にすることです。平和を大切にしつつ、役員も職員も皆がいきいきと働く京都大学であってほしいと思っています。

京都大学学術出版会が出した「量子の世界」の「はじめに」に、小山勝二先生が書いておられますが、「日本に京都大学があつてよかった」と皆さんにおっしゃっていただけるようになることを目指す、それを今年の仕事の目標にしようではありませんか。

どうか、今年も何よりも健康に気を配って、充実した仕事をしつつ、また余暇も楽しむようこころがけていただきたいと思います。

## 大学の動き

### 新年名刺交換会

1月4日(木)午前10時、時計台記念館国際交流ホールにおいて、尾池和夫総長をはじめ岡本道雄元総長、沢田敏男元総長、西島安則元総長、井村裕夫元総長、長尾 真前総長、各名誉教授、各理事・副学長、各部局長および教職員約250名が出席して新年名刺交換会が行われた。尾池総長による新年の挨拶のあと、岡本元総長の乾杯の発声で新年を祝い、会は午前11時に盛会のうちに終了した。



## 第8回京都大学国際シンポジウム「地球社会の調和ある共存に向けて」をバンコクで開催

第8回京都大学国際シンポジウムが平成18年11月23日(木)～25日(土)にバンコクのナイラートパークホテルにおいて開催された。このシンポジウムは、平成12(2000)年から続いており、今回の趣旨は、京都大学の基本理念「地球社会の調和ある共存への貢献」を正面に掲げ、人間界と自然界をつつむ総体としての「地球社会」が輝きある安定を保つにはどのような学術貢献ができるのかを分野を越えて論じ合うものであった。

出席者は本学から69名、その他の研究機関から79名の総数148名、そのうち外国からの出席者は、タイの58名を筆頭に、マレーシア、カンボジア、インドネシア、インド、オーストラリア、アメリカ合衆国、英国などからの参加があった。

企画は、7つの21世紀COE研究組織および1研究ユニットの各代表と国際交流推進機構が共同し、事務は国際部国際交流課が担当した。また京都大学教育研究振興財団から支援を受けた。

初日には、約50点のポスター・パネルが並ぶ会場でレセプションが開催された。

2日目は開会式と基調講演が行われ、横山俊夫副学長・国際交流推進機構長の趣旨説明に続き、チュラロンコン大学 Soottiporn Chittmittrapap 副学長、キングモンクット工科大学 Kraiwood Kiattikomol 学長、ラジャマンガラ工科大学 Sakit Chantanotoke 副学長、カセサート大学 Jesda Kaewkulaya 副学長、タマサート大学 Tawee Chaisomphob 副学長から祝辞が述べられた。松本 紘研究・財務担当理事・副学長から主催者として挨拶の後、基調講演は、井合 進生存基盤科学研究ユニット長と平松幸三アジ



バンコクナイラートパークホテルでの開会式

ア・アフリカ地域研究研究科長により行われた。午後から＜人間界と自然界の共存＞をテーマに総合セッションが開かれた。担当COEは、「生物多様性研究の統合のための拠点形成」、「昆虫科学が拓く未来型食料環境学の創生」、「微生物機能の戦略的活用による生産基盤拠点」、「世界を先導する総合的地域研究拠点の形成」であった。夕刻の松本理事招宴では、ラジャマンガラ工科大学の演劇・音楽学部学生たちによるタイ各地の新旧舞踊が披露され、懇親の場がさらに華やいた。

総合セッションは最終日にも続き、まずCOE「活地球圏の変動解明」グループが前日からのテーマを再論したあと、＜人間と人工環境の共存＞をめぐって、COE「環境調和型エネルギーの研究教育拠点形成」と「災害学理の究明と防災学の構築」が新知見を発表した。午後は総括パネル討論にあてられた。司会は、吉川 暹エネルギー理工学研究所教授であった。「調和ある共存」、「有効な情報共有とネットワーク構築」などをめぐって会場からの発言も相次ぎ、白熱した議論となった。閉会にあたり、シンポジウムが困難な課題をとりあげながら悲観論に終わらず、バイオ技術の可能性や、微生物や昆虫の世界の豊かさも見えだしたことへの評価が語られた。この集会で、実のある学際対話を可能にしたものは、事前に三才学林でなされた報告者相互の言語上の工夫の積み重ねであった。

現在、国際交流推進機構では、和文による全体概要と開会式およびパネルディスカッションの英文報告書の出版を準備している。

(国際交流推進機構)



3日目の総括パネル討論



## 部局の動き

## 化学研究所創立80周年記念行事を挙行

平成18年11月2日(木)、創立80周年を迎えた化学研究所は、時計台記念館において記念講演会・展示会・記念式典および祝賀会を挙行了。化学研究所は、大正15(1926)年10月4日に附置されて以来、化学に関する幅広い分野の研究を、基礎・応用の両面で展開している。

記念行事当日の午前中には、時計台記念館国際交流ホールにおいて、現在の化学研究所を紹介する展示会を行った。研究所の5つの研究系と3つの研究センターならびに、これらを構成する31研究領域の各研究内容について、ポスターや展示物、モニターなどで紹介した。



記念式典の様子

室内壁面では、当日出席者に配付されたDVD映像が上映され、入場者の足を止めていた。午後からは百周年記念ホールで記念講演会を開催した。江崎信芳所長による研究所の過去、現在、未来に関する



研究内容のポスター展示



「終わりになき知への挑戦」の展示



江崎所長の総括講演

総括講演に続き、時任宣博教授、小野輝男教授、金光義彦教授、上杉志成教授による4件の学術講演が行われた。

記念式典では、江崎所長の式辞に続いて尾池和夫総長、徳永 保文部科学省研究振興局長(代理・森 晃憲研究振興局学術機関課長)、茅 幸二理化学研究所中央研究所長、村井眞二科学技術振興機構特任フェローから祝辞が述べられた。

記念講演会・記念式典には、産官学の各界から230名を超える参加者を得て、一般参加、所内参加を合わせて、500席が満席となる盛況ぶりであった。記念祝賀会は、国際交流ホールに約360名の参加者を得て、盛会のうちに終了した。

また、記念行事の一環として、10月3日(火)から式典後の11月5日(日)まで、時計台記念館の歴史展示室内企画室において、歴史展示「終わりになき知への挑戦」を開催したが、記念行事当日の入場者数は233名を数えた。化学研究所80年の足跡を、創立当初の研究資料や、研究成果を物語る数々の展示品を通して眺めたもので、1ヶ月にわたる展示期間の総入場者数は約3800名を記録した。

この記念行事の開催は、研究所のこれまでの歩みを振り返り、今日の時代における化学研究所のあり方や、今後の指針への足がかりとなる「化学研究所のアイデンティティ」を再確認する好機であったと捉えている。



記念祝賀会での鏡開きの様子

(化学研究所)

## 防災研究所が江原国立大学校防災技術専門大学院と部局間学術交流協定を締結

平成18年11月15日(水)に防災研究所において、河田恵昭防災研究所長と鄭道永江原国立大学校防災技術専門大学院長により部局間学術交流協定の調印式が行われた。

江原国立大学校は、今年、三陟大学校と統合再編され、大韓民国でも最大規模の総合大学となった。同大学校は天災が多い地域(江原道)にあり、大韓民国政府から今後3年間に150億ウォン(約15億円)の補助をうけ、防災科学の研究・教育に取り組んでいく。

防災研究所の寶 馨教授が4年前に突発災害調査のため江原道を訪問したことがきっかけとなり交流が開始され、その実績を踏まえて協定の締結に至ったものである。防災研究所では現在21件の学術交流協定を締結しているが、大韓民国との協定は今回が初めてとなる。

両機関は、今回の交流協定の調印により、さらに強い協力関係を築いていくことになり、新たな共同研究やシンポジウムの実施、人物交流等を通して、学術研究の推進と教育活動の強化を図っていく。

(防災研究所)



河田所長(前列左から2人目)と鄭院長(前列右から2人目)

### 日誌 2006.11.1 ~ 11.30

- |  |                                      |
|--|--------------------------------------|
| 11月1日 全学共通教育システム委員会                                      | 14日 部局長会議                            |
| 〳 IIOフェア   | 〳 全学共通教育委員会                          |
| 〳 フランス, Jean Gueguinou フランス政府代表部ユネスコ大使 他2名, 総長他と懇談(2日まで) | 〳 動物実験委員会                            |
| 2日 図書館協議会  | 15日 国際交流委員会                          |
| 3日 ホームカミングデイ   | 16日 第3回京都大学・東京フォーラム                  |
| 〳 京都大学同窓会設立総会  | 17日 中国, 王生洪 復旦大学学長 他3名, 総長他と懇談       |
| 4日 湯川秀樹・朝永振一郎生誕100年記念シンポジウム                              | 20日 役員会                              |
| 6日 総長, タイを訪問(10日まで)                                      | 21日 教育研究評議会                          |
| 9日 財務委員会   | 〳 韓国, Un-chan Chung 前ソウル大学総長, 総長他と懇談 |
| 〳 職員組合との交渉   | 23日 第8回京都大学国際シンポジウム(25日まで)           |
| 10日 学生部委員会   | 〳 11月祭(26日まで)                        |
| 13日 役員会  |                                      |

## 寸言

## 一艇あって一人なし

伊藤 七郎

京大ボート部は、部員男女併せて120人、大津市石山の瀬田川河畔に艇庫・合宿所があります。石山から京大吉田キャンパスまで18キロ、部員はシーズン中、合宿所に泊まり早朝練習を済ませてから通学するのが普通です。

合宿所の管理の一切は部員の自治にまかされ、光熱費・食料費など生活費用は個人負担です。

ボートを中心としてミツバチの巣のように役割分担をした共同社会(ゲマインシャフト)です。すべては自己犠牲の精神で行われ、一切の強制はありません。



## 京大ボート部の組織

部長 京大教授が就任

監督 社会人OBが就任

コーチ

(分担) ヘッドコーチ、サブコーチ、新人コーチ、女子コーチ

(身分) 社会人コーチ、院生コーチ、学生コーチ

## ◎ 現役部員組織

主将、副将、マネージャー

なお、マネージャーは、チーフマネ、会計マネ、広報マネ、濃青担当マネ、エッセンマネ、東大戦マネなど多岐に亘り役割分担します。

また、マネージャーにはOBの寄付集めの重要課題があります。

## ◎ レース種目

エイト

フォア(舵手付き、舵手なし2種目あり)

ペア(舵手付き、舵手なし2種目あり)

クオドルプル(4人漕ぎスカル)

ダブルスカル

シングルスカル

ボート競技には、対校クルーのほかセカンドクルー、サードクルー、新人クルーがあり、部員全部が何かのレースに参加できます。

女子クルーも各種目編成され女子担当コーチが指導します。

## ◎ 『一艇あって一人なし』

エイトはコックス、整調、7番、6番、5番、4番、3番、2番、バウの9人で構成します。漕手8人は同じフォーム、同じリズムで漕ぐ。それをコックスが統制します。

1つのストロークはキャッチ、ミドル、フィニシュに分れます。オールで軟らかく水をキャッチし、フィニシュに最大の力を集中する。強いオールに押され水は固体の壁となりオールの後ろは真空ができる。それでオールは水からハネ出ます。これを「フィニシュを決める」と言います。8人が揃って「フィニシュを決める」と艇は最高のスピードが出る。そして美しいリズムが出来る。このとき、漕手も最高の快感を味わいます。1ストローク毎に水面に8つの深い泡を盛り上げ、飛ぶように艇は進みます。

このときの漕手の心境が「一艇あって一人なし」です。ボートの醍醐味はここに 있습니다。

平成18年12月9日(土)、ボート部創立百周年・医学部ボート部創立五十周年記念式典を京大時計台記念館百周年記念ホールで行いました。

ご招待したアメリカ・インディアナ州パデュー大学ボート部コーチ：デイビッド クーシックさんの格言をご紹介します。

“In rowing, there is no room for those who do not have unquestioned work ethic in pulling for each other while pulling with each other.”

「ボートには、クルーのメンバーと共に漕ぐ 時にメンバーのために漕ぐ 疑いない実践倫理を持つ者のみ参加できる」

(いとう しちろう 昭和29年農学部卒 株式会社イトーキ相談役 京大ボート部濃青会長)



## 随想

## 「民主」とデモクラシー

名誉教授 狭間 直樹

歴史の文献を読むにあたり、まずはわれわれの持つ常識から出発するしかない。しかし当然のことながら、その時代状況に即した読解がもてられるのであって、そこに止まっているのではない。



中国近代の文献で「民主」という語を目にすれば、まずデモクラシーの訳語としての民主主義を連想するだろう。実際、民国初年の新文化運動のさいに、陳独秀が『新青年』で鼓吹した「徳先生」とは「徳莫克拉西(Democracy)」のことであり、その訳語は民主主義が用いられることもあれば、民主と簡称されることもあった。つまり、1910年代後半以後は、私たちの常識となっている概念と、ほぼ重なりあうのである。私もかなりのあいだ、清末の文献で「民主」の語に出会えば、ごく普通にデモクラシーの意味でもって理解してきた。しかし中国の近代において、「民主」という語はまずプレジデントの訳語として登場してきたのである。

始皇帝以来、二千有余年にわたって皇帝支配のもとにあった中華の世界の人士にとっては、統治機構の頂点に君臨するものとして、皇帝以外のものを考えることは大層むづかしいことであった。農民反乱の領袖でも数県程度の領域を支配下におさめると、500メートル四方くらいの宮城をつくって皇帝を称するものがいくらか居たのである。

したがって、史上に前例のないアメリカのプレジデントというものを取りあげなければならなくなったとき、すぐに適当な訳語を確定することができず、<sup>プレジデント</sup>「伯理璽天徳」と音をあてておくというのが普通の方法だった。窮して「皇帝」と訳したものもあったといわれるが、これでは最高の統治権者の意味は表せて

も、中華世界に未曾有の血統による世襲君主とはちがう、任期がかぎられた平民の首長という意味はまったく消えてしまうことになる。

そこで考え出されたのが「民主」という訳語である。「民主」という言葉は古典の『左伝』に用例があり、その意味は「民の主」、すなわち「民にとっての主」であって、君主とおなじ内容の語なのである。プレジデントの訳語としての「民主」は、「民(の身分)である主」という意味がこめられての訳語だから、古典の用例とはまったくちがう言葉としてもちいられることになったのだが、外国の制度の説明だったからか、とくに問題となるような誤解がとび出すということもなく、1890年代には定着する。つまり、「民主」とは、「君」ではなく「民」である主＝首長ということを第一義とする言葉として生まれ、清末にはほぼその意味でもちいられたのである。

もちろん、「民主」が選挙により選ばれることは前提されているのだから、その語の背景にデモクラシーの響きを見てとることは、なんら間違いではない。しかし、プレジデントの訳語としての「民主」とデモクラシーの訳語としての民主(民主主義)とのあいだに、かなり隔たりがあることもたしかである。やはり清末における「民主」は、まずプレジデントと理解されなければならず、「民主国」とは「(君主ではなく)民主(を有する)国」であり、「民主政体」とは「(君主ではなく)民主(を擁する)政体」なのであった。「民主」がなによりもまず「君主」と二者択一の言葉であったという歴史的な位相をしっかりと押さえないかぎり、当時の人びとの時代思潮、日常生活としっかりかみあった理解を確立することはむづかしいのである。

(はざま なおき 元人文科学研究所教授 平成13年退官、専門は中国近現代史)

## 洛書

## 上海センターの活動について

山本 裕美

大学院経済学研究科附属上海センターは2006年、以下のような活動を行った。

国際会議開催では、6月には国際セミナー「中国の産学連携について」(報告者：胡建績復旦大学管理学院教授、王可炯上海復旦復華科技股份有限公司総経理)を、7月には国際シンポジウム「中国東北部振興と日本海両岸交流」(報告者：小河内敏朗元在瀋陽日本国総領事、権哲男中国延辺大学副教授、伊達俊行舞鶴港振興会常務理事、小島正憲小島衣料株式会社社長)をそれぞれ開催した。

国際会議共催では、5月に吉林大学経済学院と国際セミナー「東北部老工業基地の経済発展」(京大側報告者：山本センター長、院生韓光燦氏他、吉林大側報告者：李俊江院長、謝地教授、紀玉山教授等)を共催した。会議後、李院長より提携の申し入れがあり、今後交流協定締結に向けて交流を進める予定である。6月にはSMB Cコンサルティング株式会社と京大国際イノベーション機構は産学連携に関する講演会(報告者：復旦大学から上記2名および松重和美副学長、山本センター長)を共催した。更に11月には青海省西寧の青海民族学院において吉林大学経済学院と学術討論会を開催するとともに講演会(報告者：山本センター長、大森経徳センター協力会副会長、宮崎 卓助教授)を開催した。同月には復旦大学日本研究中心において同中心と京都大学のKyoto Sustainability Initiative と国際セミナー「経済発展過程における環境保護—日本と中国の経験」(中国側報告者：張坤民元中国環保局副局長、馬中国人民大学教授、馬永亮清華大学副教授、京大側報告者：植田和弘教授、山本センター長、森 晶寿地球環境学堂助教授、院生金紅実氏、劉春發氏等)を共催した。

国際会議参加では、5月に中国東北部の長春で開催された「東北部振興のための日中経済協力会議」に昨年に引き続き上海センターミッションとして山本



センター長、大森センター協力会副会長、小島正憲同協力会理事が参加した。小島氏は琿春市に工場を持つ企業家として図們江総合開発のセッションで報告をした。上海センターミッションは会議後延吉に飛び、延辺大学を訪問した。また12月には復旦大学主催の「日中学術フォーラム」において尾池和夫総長が基調講演をされたが、この総長ミッションに宮崎助教授、曾憲明上海センター上海支所特約研究員が随員として参加した。

国内セミナーでは、11月に定例の「中国の自動車産業セミナー」(塩地 洋教授主宰)を開催した。2005年には月例となっていたブラウンバックランチセミナーは、2006年は多忙のために事実上休会となっていたが、2007年度には再開する予定である。

調査研究受託については、国際協力銀行より「重慶市配電網改善円借款事後評価プロジェクト」(受託者代表：山本センター長)を受託して11月に北京と重慶で山本センター長と宮崎助教授等が調査を行った。2007年度に再度調査して報告書を作成する予定である。

人事面では、北野尚弘助教授の後任として同じく国際協力銀行と経済学研究科の包括的業務交流協定に基づいて宮崎助教授が6月に着任した。また上海センター運営委員会委員として森棟公夫新研究科長と植田教授が加わり、学内研究員として森地球環境学堂助教授が加わった。

2007年度企画として、1月には国際シンポジウム「近代上海像の再検討」(堀 和生教授主宰)を、7月には国際シンポジウム「西部大開発再考」を開催する予定である。後者に関しては2006年11月に上海センターのミッション(山本センター長、宮崎助教授、大森センター協力会副会長)が西安交通大学中国西部発展研究中心を訪問して1人の教授の派遣を依頼するとともに今後の学術交流計画及び学術交流協定締結について話し合った。

以上が2006年4月以降の上海センターの主要な活動状況である。2007年度も上海センターは種々の活動を実施しますのでご協力、ご支援の程宜しくお願い申し上げる次第です。

(やまもと ひろみ 大学院経済学研究科附属上海センター長、専門は中国経済及び開発経済学)

## 栄誉

### 吉川忠夫名誉教授、御牧克己文学研究科教授が日本学士院会員に選ばれる

このたび、吉川忠夫名誉教授、御牧克己文学研究科教授が日本学士院会員に選ばれました。以下に両氏の略歴、業績等を紹介します。

吉川忠夫名誉教授は、昭和34年に京都大学文学部史学科を卒業、東海大学文学部講師、本学教養部助教授を経て、同49年に人文科学研究所助教授に配置換、同59年教授に昇任、平成3年より2年間人文科学研究所長を兼任され、同12年停年により退官、京都大学名誉教授の称号を受けられた。



吉川名誉教授は、後漢時代から隋唐時代に至る中国史および中国思想史の諸分野において、数多くの優れた業績を挙げてこられた。その業績は大別して次の二つに分けられる。第一は、六朝貴族制社会の研究。南朝宋の創始者である劉裕を例として、武人と貴族とが合体融合して権力機構を形成していくという南朝政権の本質を明らかにした『劉裕』、東晋期に文化的優位を保ちつつも、河北を異民族支配に委ね、南北対峙の状況を受け入れざるを得なかった南朝政権が、梁末に起こった侯景の乱を契機として、軍事的にも北朝に打ち打ちできなくなり、やがてその終焉を迎えるに至る過程と、そこにあらわれた南朝貴族社会の特質を解明した『侯景の乱始末記—南朝貴族社会の命運』などは、その代表的な業績である。

御牧克己教授は、昭和44年3月京都大学文学部哲学科(仏教学専攻)を卒業、同46年3月京都大学大学院文学研究科修士課程(宗教学専攻)を修了後、博士課程に進学された。昭和47年10月フランス政府給費留学生として渡仏し、パリ第三大学博士課程に編入学、同50年6月同課程(インド学専攻)を修了し、Ph.D.の学位を取得された。昭和50年12月京都大学人文科学研究所の助手に採用、同57年4月から京都大学文学部助教授に配置換、平成4年1月に教授に昇任、同8年4月には大学院重点化により大学院文学研究科教授となり東洋古典学講座(仏教学専修)を担当して現在に至っている。この間、同教授は東洋古典学講座(仏教学専修)担任の教授として学部および大学院学



第二は、『六朝精神史研究』や『中国人の宗教意識』などの六朝精神史を中心とする思想史研究。中国思想史上における六朝時代の特質は、漢代以来の伝統を継承する儒教、西方から伝来した仏教、中国人の民族宗教として成立した道教、これら三者が並存し、その間で相互の浸透、反発、融合が繰り返された、中国史上他に例を見ない宗教の時代であったという点にある。吉川名誉教授は、このような儒教・仏教・道教が複雑に錯綜した時代の人々の生活と精神の営みとを、広汎な資料を駆使し、かつ綿密な文献批判のもとに生き生きと描きだすことによって、従来の歴史研究や思想史研究の枠に収まらない、独創的な観点と方法とを打ち立てられた。

また、人文科学研究所で組織された共同研究班の成果である『真誥研究(訳注篇)』や近年刊行された『後漢書』全10冊などの訳注類は、深い学識に裏付けられた、余人の追従を許さぬ古典の読解力を遺憾なく発揮されたものであり、内外の学界から高い評価を得ている。今回の学士院会員への選出は、吉川名誉教授のこれまでの一連の業績が評価されたものであり、まことに喜ばしい。

(人文科学研究所)

生の教育・研究指導ならびに後進研究者の育成に尽力されるとともに、附属図書館商議会商議員を努め大学の管理運営に寄与されている。

同教授は、研究面では、はじめ後期インド仏教の認識論・論理学に深い関心を示し優れた業績を挙げられたが、フランス留学中に習得したチベット学の知識を進展させ、特にインド・チベット仏教の宗義文献の解明に大きな貢献を為された。また、ボン教研究やチベット土着語彙集、土着文法の分野においても業績を発表し、チベット学全体を幅広く見渡して研究を継続してこられた。顕著な業績として"La réfutation bouddhique de la permanence des choses (sthirasiddhidūṣaṇa) et la preuve de la momentanéité des choses (kṣaṇabhaṅgasiddhi)" (Paris, 1976), "Blo gsal grub mtha" (Kyoto, 1982), 『ツォンカパ』(東京, 1996), "Bon sgo gsal byed"



(Tokyo, 1997)などの著書および多くの論文がある。

同教授の研究は国際的に高い評価を受けており、これまでにカリフォルニア大学バークレー校(93年冬学期)、ハーヴァード大学(00年夏学期)、コレージュ・ド・フランス(94年秋)、国立高等研究院(Ecole Pratique des Hautes Études, 第五部門:宗教学部門)(97年秋, 05年春)、ウィーン大学(95年夏学期、

02年夏学期)、ハンブルク大学(04年夏学期)の諸大学、研究機関に客員教授として招かれ、インド・チベット仏教哲学およびボン教思想を講じられた。

今回の学士院会員への選定は、これまでの同教授の一連の業績、研究教育活動が評価されたものであり大変喜ばしい。

(大学院文学研究科)

## 平成18年度医学教育等関係業務功労者表彰

平成18年度医学教育等関係業務功労者表彰式が平成18年11月29日(水)に行われ、本学医学部附属病院の大森京子准看護師と小森恵美子病理細菌技術員が文部科学大臣表彰を受けた。

大森准看護師は、先端医療をはじめとする種々の業務において、技師等との連携に努め、円滑で安全な検査の実施等に大きく貢献していること、また、小森病理細菌技術員は、検査部での放射性同位元素を用いない検査法への転換にあたり、中心的な役割を果たしていること等により表彰された。



大森京子准看護師



小森恵美子病理細菌技術員

(医学部附属病院)

## 話題

### 「福井謙一京都大学名誉教授ノーベル化学賞受賞25周年記念シンポジウム」の開催

平成18年11月29日(水)に時計台記念館において、「福井謙一京都大学名誉教授ノーベル化学賞受賞25周年記念シンポジウム」を福井謙一記念研究センターが中心となり、工学研究科、理学研究科、化学研究所の共催で開催した。旧福井研究室や関連研究のOBも含め、約250名が参加し、熱気にあふれたシンポジウムとなった。榊 茂好センター長、丸山正樹理事・副学長、西本清一副学長・工学研究科長、北村雅夫理学研究科長の挨拶の後、日本学士院長の長倉三郎先生に、福井先生の思い出を含めた祝辞をいただいた。

その後、日本化学会長の藤嶋 昭先生による記念特別講演「研究には物華天宝と人傑地霊」に続いて、学術講演として、福井謙一記念研究センターリサーチリーダーの諸熊奎治先生と工学研究科教授の中辻博先生がそれぞれ「複雑分子系の複合分子理論によるシミュレーションを目指して」、「量子化学のパラダイム・シフトー シュレーディンガー方程式の一般的解法」という題目で講演を行い、福井謙一記念研究センターに関連する最先端の理論化学の成果が紹介された。また、若手研究者や大学院生による



榊センター長の開会挨拶

ポスター発表のほか、「在りし日の福井先生」と題して福井名誉教授の写真展も行った。

シンポジウム後、沢田敏男元総長、長尾 真前総長、福井謙一先生の奥様のご列席をいただき、記念パーティーが催された。祝辞・講演・パーティーの席では、福井謙一先生のお人柄、基礎を重視していらっしゃる研究姿勢、その存在の大きさ、現在の科学における重要性が参加者から熱心に語られた。

(福井謙一記念研究センター)

## フィールド研「第3回時計台対話集会」を開催

平成18年12月23日(土)午後にフィールド科学教育研究センター(フィールド研)主催「第3回時計台対話集会」が開催された。今回の対話集会は“森里海連環学が、日本の木文化を再生する”との主題のもと、最初に村田泰隆氏(株式会社村田製作所代表取締役社長)と尾池和夫総長の間で、21世紀の人間と森里海連環学について雄大な広がりを持つ対談が行われた。引き続き竹内典之フィールド研教授と山田壽夫林野庁九州森林管理局長による講演が行われた後、アウトドアライター天野礼子氏の切れのよい司会のもと、“林業が生業(なりわい)となることが、木文化を再生する”についてパネル討論が行われた。パネラーにはいずれも全国各地で多様な木の使い方を実践されている経験豊かな論客である小林正美地球環境学堂教授、小池一三小池創作所代表、石出和博HOP代表、中島浩一郎銘建工業社長の各氏によ



百周年記念ホールでの対話集会

り説得力と切実感にあふれた意見が交わされた。本集会の特徴の一つである講演者やパネラーとフロアーとの対話では、高知や新潟などからの参加者から質問が相次いだ。

参加者総数は430名を超え、近畿2府4県を中心に、高知・福井・三重・愛知・千葉・東京・長野・新潟の他に、沖縄より1名の参加があった。国際交流ホールでは、フィールド研の各施設と由良川・古座川・仁淀川プロジェクトならびにj. Podのパネル紹介が併設された。アンケートの中では、「講義では林業の暗い話ばかりしか聞かされていなかったが、今日明るい未来を実感できて元気づけられた」などの感想が寄せられた。

(フィールド科学教育研究センター)



尾池総長と村田社長との対談

## 「事務改善提案コンクール」表彰式を開催

「事務改善提案コンクール」の表彰式が、平成18年12月4日(月)、総長応接室で行われた。

同コンクールは、本学における事務改善に関する具体的な提案を広く教職員から募集し、今後の事務の合理化、効率化その他事務改善に資することを目的として実施されたものであり、今年度は第2回目となる。募集は、7月から8月にかけて行われ、個人・グループ合わせて81件の応募があった。

応募のあった提案については、「全提案の有効なアイデアを可能な限り事務改革に取り入れて、全学的な事務簡素・合理化を促進する」ことを目標とし、実現可能性について各所管部での検討を経て、事務改善の効果、実現可能性、費用対効果の観点から、審査委員会において審査が行われ、その結果、右記の特選1件、入選8件が選出された。

表彰式では、尾池和夫総長より受賞者へ、それぞれ表彰状の授与と、副賞が贈られた。

### 【特選(1件)】

事務改善検討グループ 医学研究科  
「大学業務方法の分析、見直しによる事務効率化(ミニバランススコアカードの実施)」

### 【入選(8件)】

施設企画課総括調整・整備企画グループ	施設・環境部
森 直樹, 小谷将司	医学部附属病院
岸本典文	数理解析研究所
経理課資産管理掛	工学研究科
藤田 修	数理解析研究所
井上忠士	医学部附属病院
武田賀津美	理学研究科
宇治地区総務・企画広報グループ	宇治地区事務部

表彰者の提案概要などについては、京都大学ホームページの学内専用掲示板をご参照ください。

[http://www.kyoto-u.ac.jp/notice/05\\_notice/close/common/kaikaku/concours18\\_2.htm](http://www.kyoto-u.ac.jp/notice/05_notice/close/common/kaikaku/concours18_2.htm)



## 訃報

このたび、向井<sup>むかい</sup> 滋<sup>しげる</sup> 名誉教授、米満<sup>よねみつ</sup> 利行<sup>としゆき</sup> 理学研究科財務管理室施設環境安全掛長、寺井<sup>てらい</sup> 俊夫<sup>としお</sup> 名誉教授、尾崎<sup>おざき</sup> 雄二郎<sup>ゆうじろう</sup> 名誉教授が逝去されました。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

以下に各氏の略歴、業績等を紹介します。

## 向井 滋 名誉教授



向井 滋先生は、平成18年5月27日逝去された。享年92。

先生は、昭和12年京都帝国大学工学部採鉱冶金学科を卒業され、古河合名会社に3年間勤務後、同15年久留米高等工業学校教授、同28年九州大学産業科学研究所助教授を経て、同31年京都大学工学部教授に就任された。鉱山学第5講座(選鉱学講座)を担当、昭和38年学科改組に伴い資源工学第5講座(資源精製学講座)を担当された。昭和52年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間、昭和44年より同52年まで東南アジア研究センター協議員を務められ、大学の管理運営に寄与された。

先生は、資源工学における選鉱学の研究で優れた業績を残され、その発展に貢献されたとともに、当

該分野の教育にも力を注がれ多くの優秀な研究者・教育者・技術者を育成された。選鉱学は鉱石の粉碎、分級、鉱物の分離・選別、脱水、加工の広い技術にわたる。特に鉱物分離の浮選法について鉱物学、粉体工学、界面化学の観点から分離機構を検討された。浮選現象に及ぼす粒子径の影響、硫化鉱物に対する捕収剤および抑制剤の反応、非硫化鉱物に対する浮選剤の反応などの諸特性を解明され、その成果は国内外で高く評価されている。これらの研究成果を基礎に、廃水中に含まれる微量の重金属類を浮選法で回収除去する基礎研究を推進し、環境保全に対する浮選技術という新しい応用分野を開拓された。なお、先生は日本鉱業会、資源処理技術研究会(環境資源工学会に改称)などに活躍され、要職を歴任された。

これら一連の教育・研究に関する功績により昭和62年4月に勲二等瑞宝章を受けられた。

(大学院工学研究科)

## 米満 利行 理学研究科財務管理室施設環境安全掛長



米満利行掛長は、平成18年8月12日に逝去された。享年38。

同氏は、昭和61年4月和歌山工業高等専門学校会計課に採用され、同63年4月大臣官房文教施設部大阪工事事務所

併任後、平成元年4月京都大学施設部整備課に転任さ

れ、同7年4月工学部経理課、同11年4月施設部電気情報設備課、同14年4月同課第三電気掛主任、同16年4月同課保全企画掛主任、同17年4月施設・環境部施設活用課活用企画掛主任を経て、同18年4月より理学研究科財務管理室施設環境安全掛長に昇任された。

同氏は、常に誠実、真面目に責任感を持って職務に取り組み、もってその職責を全うされた。

(大学院理学研究科)

## 寺井 俊夫 名誉教授



寺井俊夫先生は、平成18年12月2日逝去された。享年75。

先生は、昭和28年京都大学工学部建築学科を卒業、同30年同大学大学院工学研究科修士課程建築学専攻を修了後、同年福井大学工学部助手に就任された。その後、

福井大学工学部助教授、京都大学工学部助教授を経

て、昭和56年教授に就任、建築設備講座を担当された。平成6年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。退官後、近畿大学工学部建築学科教授を6年間務められた。

先生は、主に積分方程式を用いた建築伝熱と音場の解析法の研究および建築火災時の煙流動の人命に与える危険性の軽減手法と建築部材の耐火性能解析法の研究を遂行された。特に積分方程式を用いた伝熱と音場の解析手法を世界に先駆けて建築分野に導



入し、様々な新しい手法を開発してこの分野をリードすると共にその発展に貢献された。

また、建物火災時の安全性の向上を目指して、建築における複雑な煙流動現象の解明と計算手法の開発ならびに鉄筋コンクリートの昇温メカニズムの解明や耐火設計法の開発を行い、これらの成果を建物

安全設計指針へ導入することにも尽力された。

これら多くの研究業績により日本建築学会論文賞を授与されるとともに、日本建築センター、日本消防設備安全センターなどで実建物の防災性能評定の審査委員長などを務め社会に貢献された。

(大学院工学研究科)

## 尾崎 雄二郎 名誉教授



尾崎雄二郎先生は、平成18年12月8日逝去された。享年80。

先生は、昭和26年京都大学文学部文学科を卒業、同31年同大学大学院(文学研究科)を修了した後、立命館大学文学部講師を経て、同34年本学教養部講師、同35年助教授、同46年教授に就任された。同50年人文科学研究所に配置換え、平成元年停年により退官、名誉教授の称号を受けられた。また昭和62年より退官までは人文科学研究所長であった。

先生の主たる学術的貢献は中国音韻史の分野においてなされた。中国語の上古音において広く受け入れられてきた複声母の再構形に対して、史的音声学

という独自の方法を用いることで全く新しい解決法を提示し、上古音研究に新たな展望を切り開いた。また中国の音韻学の中にサンスクリット語学の影響が大きく関わっていることを指摘しつつ、切韻の韻の配列や等韻図の等位について新しい考えを打ち出し、学界に大きな衝撃を与えた。先生の論考は、個性的な文体と独特の論理構成によって、ままた難解とされることがあったが、長い射程を見すえた本質的な問題提起は後進にとって常に頂門の一針であった。先生はまた若い研究者たちを組織して、清朝考證学の成果の最高峰ともいえる段玉裁「説文解字注」訳注の大冊を陸続公刊した。

これらの業績に対し、平成16年春の叙勲で瑞宝中綬章が授与されている。

(人文科学研究所)

## お知らせ

### 霊長類研究所オープンキャンパス・大学院ガイダンス

オープンキャンパスは大学院受験希望者および霊長類学に興味のある大学生(主に学部2～4年生)を対象に開催されます。霊長類研究所で現在行っている研究を紹介し、最新の研究成果について分かりやすく解説します。講義の合間には、所内見学や教員との懇談会も予定しています。実際の研究の様子を直接見たり聞いたり、大学院の研究について教員に相談することもできます。

京都大学霊長類研究所は、昭和42(1967)年に附置された共同利用研究所です。大学院理学研究科生物科学専攻霊長類学系として、修士課程および博士課程の大学院をもち、若手研究者を育成しています。ゲノムから生態まで含めた幅広い研究分野で構成され、多様なサルを対象に学際的な基礎研究のできる機関として世界に知られています。

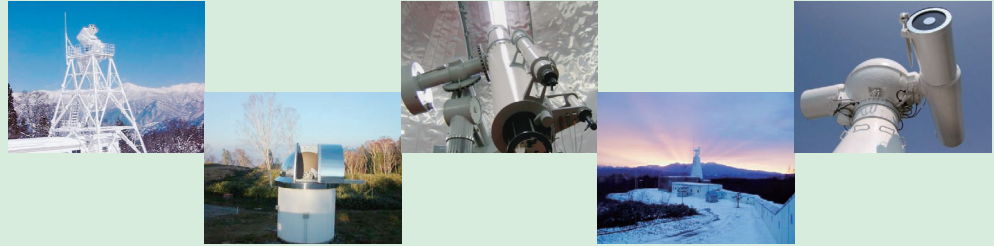
1. 日 程：2月22日(木)～2月23日(金)
2. 場 所：京都大学霊長類研究所(愛知県犬山市)
3. 定 員：約60名(無料)
4. 応募締切：1月29日(月)
5. 問い合わせ先：京都大学霊長類研究所総務掛

TEL：0568-63-0567 FAX：0568-63-0085 E-mail：open07@pri.kyoto-u.ac.jp

詳細は霊長類研究所ホームページをご覧ください。

[http://www.pri.kyoto-u.ac.jp/official/open\\_campus\\_2007/index.htm](http://www.pri.kyoto-u.ac.jp/official/open_campus_2007/index.htm)

## 隔地施設 紹介



### 理学研究科附属天文台 (<http://www.kwasan.kyoto-u.ac.jp>)

理学研究科附属天文台は、観測の前線基地である飛騨天文台と、データ解析および計算機シミュレーションセンターとして、また学生実習施設としての役割を持つ花山天文台から構成されています。また、北部キャンパスの一角(理学部4号館4階、宇宙物理学教室事務室の隣)に天文台分室を設けています。

花山天文台の歴史は古く、昭和4(1929)年に設立され、小学校の校歌にも歌われています。新幹線の窓からの風景で、小さくてもきらりと光る天文台のドームに気付かれている方もいらっしゃるかもしれません。同天文台には45cm 屈折望遠鏡、70cm シーロスタット太陽望遠鏡、ザートリウス18cm 屈折望遠鏡があります。これらの望遠鏡は現在主として学生実習用に使っていますが、ザートリウス屈折望遠鏡は定常的に太陽活動観測を行っています。



花山天文台全景

第一線の観測は、よりよい観測環境を求めて昭和43(1968)年に設立された飛騨天文台で行っています。同天文台には60cm 反射望遠鏡、65cm 屈折望遠鏡(屈折望遠鏡としては東洋一)、ドームレス太陽望遠鏡(太陽望遠鏡としては東洋一)、フレア監視望遠鏡、太陽磁場活動望遠鏡(太陽全面望遠鏡としては世界一)と多くの望遠鏡があります。飛騨天文台は、北アルプスを間近に臨む大雨見山にあり、標高は1280メートルです。大気は概ね静穏で非常に澄んでおり、透明度が高く、つきぬけるような青空が広がります。夜でも周囲に人口光がほとんどなく、真っ暗な空に星々がきらめきます。自然は厳しく、冬季の除雪や建物の老朽化に悩まされていますが、観測に好適な空の下、日夜データを取り続けています。

教育面では、理学部宇宙物理学教室と協力して、宇宙物理学・天文学の講義や実習を行っています。特に、飛騨天文台で8月に1週間の泊り込みで行っている全学共通科目の天体観測実習は、毎年大変な人気となっています。太陽の撮像観測、分光観測、恒星の測光観測によって、太陽表面上での爆発現象や恒星が数時間のうちに明るさを変える現象のデータを自分で取得・解析し、その機構を考えて、発表までを行っています。教育普及活動としては、毎年一回両天文台の一般公開を行い、天文学の面白さや、不思議な天体現象の数々を楽しんでもらっています。また、花山天文台では地域とのより深い連携を目指しており、その一環として今年は3回の天体観望会を行いました。小中高校生の見学や実習の受け入れも年々増えていっています。



飛騨天文台全景

研究面では、飛騨天文台の観測装置は世界屈指のもので、これを用いた太陽観測をメインに行っています。普段あまりにも当然のようにそこにある太陽ですが、全くわからないことだらけで、地上では考えられないような規模での爆発現象が頻発しています。この太陽での爆発現象は、地球上での電波障害のもとになったり、変電所の変圧器を破壊したり、はたまたオーロラを作りだしたりと、我々の生活とも深

い関係があることがわかってきました。太陽活動観測からこういうことが起こることを予測するのは「宇宙天気予報」という新しい研究分野です。学術創



成研究(代表：柴田一成，平成17年～21年)の援助を得て，その基礎研究を推進しています。また先日打ち上げられた太陽観測衛星「ひので」による研究にも深く関わっており，地上での観測と突き合わせながら共同で研究を進めていきます。これらの太陽観測をもとにして，爆発現象の機構を探り再現するための計算機シミュレーションや，恒星活動現象の観測も行っています。

また宇宙物理学教室，国立天文台，名古屋大学と共同で，民間のナノオプトニクス研究所と連携し，次世代の天文学を切り拓く複合鏡望遠鏡製作

の基礎となる超高精度研削技術の開発を，産学連携プロジェクトとして推進しています。この研削技術開発は，産業方面への発展も非常に期待される夢多きプロジェクトとなっています。

### 職員構成

教員 5名(4名)，技術職員 2名(2名)，非常勤職員 12名(6名)，ポスドク研究員 6名(2名)，大学院生 15名(カッコ内(内数)は主に飛騨天文台で研究，勤務する者。)

## 花山天文台・飛騨天文台の一般公開

理学研究科附属天文台では平成11(1999)年から毎年一回一般公開を行っており，今年度は平成18年9月30日(土)に花山，飛騨の両天文台で実施しました。今回の主な企画は，1)花山天文台のザートリウス18cm 屈折望遠鏡，70cm シーロスタット太陽望遠鏡，45cm 屈折望遠鏡や飛騨天文台の太陽磁場活動望遠鏡，ドームレス太陽望遠鏡，65cm 屈折望遠鏡等の設備やそれを用いて得られた最新の研究成果の紹介，2)テレビ会議システムを利用して両天文台をつなぎ，飛騨天文台で撮られている太陽画像をリアルタイムで解説するデジタルライブ，3)より一般的で基礎的な天文学の講演や解説ポスターの展示，ポスターを見ることで正解の分かるクイズラリー，4)廃棄CDを利用して分光器を作って色々な光を覗いてみる等の体験もの，5)計算機による天体現象のシミュレーション解説，6)45cm 屈折望遠鏡(花山)や65cm 屈折望遠鏡(飛騨)等を実際に目で覗く天体観望でした。今回は幸い好天に恵まれ，昼は太陽，夜は月のクレーターや木星の縞模様，木星の周りのガリレオ衛星などをしっかり見る事ができました。



飛騨天文台での天体観望の様子

参加者は幼児から年配の方まで年齢層は幅広く，京都府や岐阜県の方を中心に，花山天文台で約400人，飛騨天文台で約100人の参加がありました。アンケートでは，「太陽のスペクトルがきれいだった。」(花山)，「あんな山の中にこんなに大きな施設があるのに驚いた。」(飛騨)などの感想をいただきました。

今後も天文学の面白さ，奥深さを一般の方にもっと知って頂くために，この活動を続けていくつもりです。この催し物のため，京大の沢山の学生や一般のボランティアの方々に協力して頂きました。

(飛騨天文台)

住 所 岐阜県高山市上宝町蔵柱

電 話 0578-86-2311

メール webmaster@kwasan.kyoto-u.ac.jp

飛騨天文台へのアクセス

- ・JR高山駅から濃飛バス約1時間
- ・東海北陸道・飛騨清見インター(京都東インターから約240km)から自動車約1時間30分